

特116

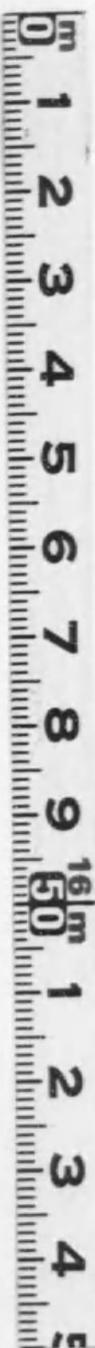
717

地拍子附
大小鼓太
鼓手配附

楊

川

内十五ノ四



始



此程に唯今様子の母の方へと急ぎ申。こ
 のあたりにてありげに能まづまづ案内
 を申さばやと存じ申。いかには案内申し申
 様子の母のわたり申か シテ 誰にてわたり申
 ぞ ワキレ さんば様子の御方より御文の申又
 この代物をたしかに届け申せと仰せ申
 程に。これまで持ちて来りて申。かまへて

たしかに届け申すにて申 シテ あら思ひよ
 らずやまづまづ文を見らざるにて申 カハル さい
 てもさへもこの年月の御有様見るむ
 あまりの悲しさは、人商人に身を賣り
 て、東の方へ下り申なり。その子は賣るま
 じき子にて申ものを、や、あら悲しや、は
 や今の人も行方知らずなりて申はいか

に^奉これ^{中音}を^{中音}お^{中音}雞^{中音}の^{中音}縁^{中音}と^{中音}して^{中音}。御^{中音}様^{中音}を^{中音}も^{中音}愛^{中音}へ
給^{中音}ふ^{中音}べ^{中音}し^{中音}。た^{中音}だ^{中音}返^{中音}す^{中音}返^{中音}す^{中音}も^{中音}御^{中音}名^{中音}残^{中音}こ^{中音}そ^{中音}惜^{中音}

し^{中音}ら^{中音}ふ^{中音}べ^{中音}

下歌
地

名^{中音}ご^{中音}り^{中音}措^{中音}し^{中音}く^{中音}は^{中音}な^{中音}に^{中音}し^{中音}にか^{中音}す

添^{中音}は^{中音}で^{中音}エ^{中音}ト

は^{中音}は^{中音}に^{中音}は^{中音}わ^{中音}か^{中音}ら^{中音}ん

上歌

ひ^{中音}ご^{中音}り^{中音}ふ^{中音}せ^{中音}屋^{中音}の^{中音}く^{中音}さ^{中音}の^{中音}戸^{中音}の^{中音}

ひ^{中音}ご^{中音}り^{中音}ふ^{中音}せ^{中音}屋^{中音}の^{中音}く^{中音}さ^{中音}の^{中音}戸^{中音}の^{中音}

明^{中音}か^{中音}し^{中音}く^{中音}ら^{中音}し^{中音}て^{中音}憂^{中音}き^{中音}と^{中音}き^{中音}い^{中音}も

予^{中音}を^{中音}見^{中音}い^{中音}て^{中音}れ^{中音}ば^{中音}こ^{中音}そ^{中音}な^{中音}ぐ^{中音}さ^{中音}む^{中音}に^{中音}

い^{中音}き^{中音}り^{中音}と^{中音}て^{中音}は^{中音}わ^{中音}が^{中音}た^{中音}の^{中音}む^{中音}

か^{中音}み^{中音}も^{中音}お^{中音}の^{中音}は^{中音}な^{中音}お^{中音}く^{中音}取^{中音}ひ^{中音}め^{中音}

の^{中音}ら^{中音}お^{中音}ん^{中音}ら^{中音}ぢ^{中音}子^{中音}な^{中音}る^{中音}も^{中音}の^{中音}を^{中音}ら

さ^{中音}く^{中音}ら^{中音}子^{中音}と^{中音}め^{中音}エ^{中音}て^{中音}た^{中音}び^{中音}た^{中音}ま^{中音}ア^{中音}へ^{中音}

さ^{中音}な^{中音}き^{中音}だ^{中音}に^{中音}任^{中音}ト^{中音}リ

(マキ) ーウーみ^マら^カれた^タる^一ふる^サどの^ノ。
 (マキ) い^イま^マは^ハな^ナに^ニに^ニか^カあ^アけ^ケく^クれ^レを^ヲ。
 (マキ) 堪^{カン}へ^ヘて^テ任^ニむ^ムべ^ベエ^エき^キ身^ミな^ナら^ラね^ネば^バ。
 (マキ) わ^ワが^ガ子^コの^ノゆ^ユく^クへ^ヘた^タづ^ヅね^ネん^ンど^ト。
 (マキ) 泣^{ナク}く^ク泣^{ナク}く^クま^マよ^ヨら^ラひ^ヒい^イお^オで^デで^デ行^コう^ウく^ク。
 (マキ) 泣^{ナク}く^ク泣^{ナク}く^クー^一ウ^ウま^マよ^ヨひ^ヒお^オで^デで^デ行^コう^ウく^ク。
 (マキ) シテ送り込アシライ 中入

《出ノ囃子》次第

止メ打切

(マキ) 次^{ツギ}第^{ダイ} ー^一ら^ラ待^マち^チ得^トた^タる^ルさ^サく^クら^ラが^ガり^リー^一。
 (マキ) ー^一ら^ラ待^マち^チ得^トた^タる^ルさ^サく^クら^ラが^ガり^リー^一。
 (マキ) や^ヤま^マア^ア路^ロの^ノは^ハー^一る^ルに^ニい^イそ^ソラ^ラが^ガア^アん^ン。
 (マキ) 地取 大小鼓はアシライを打つ(マキ) マキ

詞^{マキ} これは常^ヒ陸^{タク}の^ノ國^{クニ}磯^{イソ}部^ベ寺^{テラ}の^ノ任^ニ僧^{ソウ}に^ニて^テは^ハ又^{マタ}
 これに^ニわ^ワた^タり^リゆ^ユ切^キき^キ人^{ヒト}は^ハい^イづ^ヅく^クと^トも^モ知^チら^ラ

ず愚僧を頼む由作せし程に師弟の契

約をなし申しては又このあたりに櫻川

とて花の名所のゆゑ今を感の由申しし程

に、切き人を伴ひ唯今櫻川へと急ぎし

上敷つぐ波やま。 トリ

このもかこのものーはなざかり

詞コトいかに申ししコト。何とて遅オソクく御出ミデでてコトぞ待
 申マウしてコト。さんサン彼皆皆御供ミツケ申ししコト程
 にオソクて遅オソクなほりてコト。あオソクら見事ミセやコト。花
 は今イマを盛カワキと見えコトてコト。なナかなかの事コト花
 は今イマが盛カワキにてコト。又マタここに面白オモシロき事コトのコト。女
 物モノ狂ケレヒのコト。けケがケ。美ウツクしシきキ抄スクリ細ホソをコト持モちチてコト。桜川
 に流ナガるル花ハナをコト抄スクリひヒがケ。けケしシからラず面白オモシロ

うウ狂ケレヒひヒ。これコレに暫シバシバくク流ナガるルひヒてコト。この物モノ狂ケレヒ
 をコト切キきキ人ヒトにもモ見ミせセ糸イトらせラせセられレひヒへコト。さサら
 ばその物モノ狂ケレヒをコトかカ方カタへコトめメされレひヒへコト。心得ココロエ申マウ
 しシ。やヤあアやヤあアかカの物モノ狂ケレヒにコト。いつイツもの如ニく抄スクリ
 細ホソをコト持モちチてコト。ごゴなナたタへコト来キれレとト申マウしシ。作サへ

〔出ノ囃子〕

〔聲 狂歌〕

止ノコイ合

後シテ
 一聲未中
 後シテ
 一聲未中

いかイカにあニれレなるコト道ミチ行ユク人ヒト。桜川オウゴンには花ハナの散チリり

水か、何散りがたになりたるとや、悲しやな
 ざなきだに、行く事やすき、春の水の、流
 るる花をや、傍ふらん、花散れる木のまに
 まにとめくれば、山にも春はなくなりにけ
 りと聞く時は、少しなりとも休らはば、花
 にや、疎く、雲の色、桜花、翔、
 止るコト
 桜花散りにし風のなごりには、
 地、水なき

空に、波ぞたつ、思も深き花の雲、地、散る
 はなみだの、川やらん、これに出でたる物、狂
 の、旅郷は、籠籠日向のもの、おも、思子を失
 ひて、思ひ乱るる心づくし、の、海山、残えて、梅、岸
 の、浪立ち出でて、須磨の浦、又は、淡河の海
 過ぎて、常陸とかや、まで、下り、来ぬげにや
 親子の道ならずは、遠けき、旅を、いか、に、せん

詞(ワカ)こころ(こころ)に又名に流れたる櫻川とて。さも面

白き名所あり。別れ(わか)し子の名も櫻子なれ

ば。かたみといひをりからといひ名もなつか

いき櫻川に

地下歌(カサシ) 散(ち)り浮(う)くはな(な)の(の)ゆ(ゆ)きを散(ち)み(み)い(い)ト

へエー。みづから。はなごらも

のは(は)ある(あ)の(の)かたみ(か)の(の)こ(こ)さん(さん)ン

●小謡

上歌(カミウタ) 地(ち)はな(な)どりの(の)ト

ちわかれつ。ちわかれつ。ちわかれつ。ちわかれつ。

ちわかれつ。ちわかれつ。ちわかれつ。ちわかれつ。

行くへも知らで。あまがかる。

ひなのなが。に。おとろへばア

た。ト

逢ふとら。も。おやと子の(おやと子の)ト

あーも わすれーエーせーばーいーかならーん

うたーアーアーやーアーいーばしーこぞ。

ふーゆーごもーりーいーてー見えずとーもーラ

まはーはるべなーアるものわ

が子ーのーはなはーなご咲かぬわ

が子ーのーはなはーなご咲かぬ。

詞 この物狂の事にてありげにゆ、立ち寄り

て尋ねばやと思ひゆいかにこれなる狂女

おことの國里はいづくの人ぞ 此れは遠

の筑紫の者にてゆ うれは何とてかや

うに狂乱とはなりたるぞ さんど唯一

人ある忘れがたみの縁子に生きて離れ

てゆ程に思が乱れてゆ あら傷はしや

バ、又見申せば美しき抄細を持ち流る

る花を抄スグひあまのつさへ湯御カウの気色見え

強ツヨクひてゆは、何ナニと申したる事にてゆぞ

三さんサウシが我が故郷コキョウの御神ミカミをば、本華ホンカ開耶カイヤ姫ヒメ

と申しして、所神體シヨカミは桜木サクラキにて所シヨ入りゆさ

れば別ワケれし我が子もその御氏ミウヂ子コなれば、

桜子サクラコと名づけ、育ユクてしかば、カル神カミの御名ミナも

開耶カイヤ姫ヒメ尋タラシぬる子の名も桜子サクラコにて、又マタこの

川カハも桜川サクラカハの、名ナもなつかしき、花ハナの散チリを、

あだアタにもせじと思オモふなり、カル得トクを聞キけば

面白オモシロや、げに何事ナニコトも縁縁はありけり、さば

かり遠トホき筑紫ツクシより、この東路アキミチの桜川サクラカハまで、

降り強ツヨクふも縁縁よなり、シテまづこの川カハの名ナに

負オシふ事コト、遠トホきにつきての名譽ナホトメあり、かの

貫ツラ之ニが歌ウタはいかにカルげニげニ昔ムカシの貫ツラ之ニ

も遠けき花の都よりシテ未だ見もせぬ

常陸の國にワキ名もシテ揚子川シテありと聞クき

上歌地つねよりも、
平兼ヤ常

はる春ーウベにナレばサくらが川はハ

はる春ーウベにナレばサくらが川はハ

な波み花のはなナーアこトリ

そアーヤらハ間ナトリ

く寄すウンーらめとー詠ミたレエン

ば花は花なーゆキむヲつらゆキーイト

か古ふ古る古き古名ノのヲトミのコるセーの甲

さサーアくらビアーがハはハ

瀬シのシらナみシげエトケれバハハ

かヤーアみラなガアトトリ

すウーヤらハ信太のーらウトウトウまマ

のーう（平）かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）
かめーう（平）かめエみづのはなげ（平）

仰せぬがけふは何とて狂ひぬはぬぞ

さんど狂はするやうがゆ、梅川に花の散
ると申しゆへば、狂ひぬ程に、狂はせて御目

にかけうずるにてゆ 急いで御狂はせゆ
へ 心得申しゆ、あら笑止や、俄に山嵐のし
て梅川に花の散りゆよ よしなき事を
み山風の、奥なる花を誘ふござめれ、流
れぬさきに花抄はん げにげに見れば山
麓の、お木の梢に咲き落ちて 花の水
嵩は白妙の 波かど見れば上より散る

橋か 雲か 波か 花か 浮きまづ

雲の 川風に

次第地 散ればぞなみもさくらがは

散ればぞなみもさくらがは

ながるるはなをすくはん

地取

花の下に輝らん事を忘れ水の

地 雲を受けたる花の袖

それ水流花落ちて春ととしなへにあり

地 水凄しく風高うして鶴かへらず

岸花紅に水を照し洞樹緑に風を合む

地 山花開けて錦に似たり洞水湛へて藍の

如し 面白や思はずこころにかれ来て

地 名もなつかしみ桜川の樹の陰へ河の

● 橋か
● 雲か
● 波か
● 花か
● 浮きまづ

櫻川

十一

流波みで知る名も所からあひにあひなば

様子のこれ又他生の縁なるべし

はなのかみがみとよなるみづは

散りかかるとをとり

やアかむるよといふらん

ンアかむるよといふらん

ンアかむるよといふらん

のちにはあぐたになはなと

おもひ知る身もさていか

にみと見るぞはかなき

なみのみと見るぞはかなき

あだに散りぬるはななれば

落ちちてもみづのあはれと

落ちちてもみづのあはれと

●仕舞

(三拍)

櫻川

十三

櫻川

十四

一拾 二拾 三拾 四拾 五拾 六拾 七拾 八拾

地 ぶ すが 見 馴 れ し かも だ て を

よ く よ く 見 れ ば 地 さ く ら 子 の

は な の か ほ ば せ の

こ は 子 な り け り う ぐ ひ す の

ン 逢 ふ と き も 鳴 く 音 こ ろ そ

う れ し き な み だ な り い け れ

地 か く て と も な ひ ち ち か へ り

(カ)

(カ)

(カ)

(カ)

(カ)

か く て と も な ひ ち ち か へ り

は は を も た す け さ ま 養 へ て

ぶ つ 累 の 息 ん と な り に け り

ニ 世 あ ん ら く の 息 ぶ か き

お や 子 の み ち ゑ あり が た き

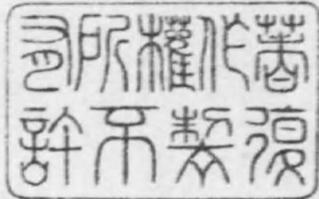
お や 子 の み ち ゑ あり が た き

親女 二

二十冬

177
A30

大正十年十月廿五日印刷
大正十年十月十三日發行



著作者 東京府下豊多摩郡淀橋町柏木百四十三番地
田崎延次郎



發行兼印刷者 京都市上京區二条通契屋町角
檜常之助



發行所 京都市神田區錦町壹丁目拾番地
檜大瓜堂書店

東京電話神田二五二八番
振替口座東京三五五二番

印刷所 東京市麹町區隼町貳拾壹番地
小林印刷株式會社

終

